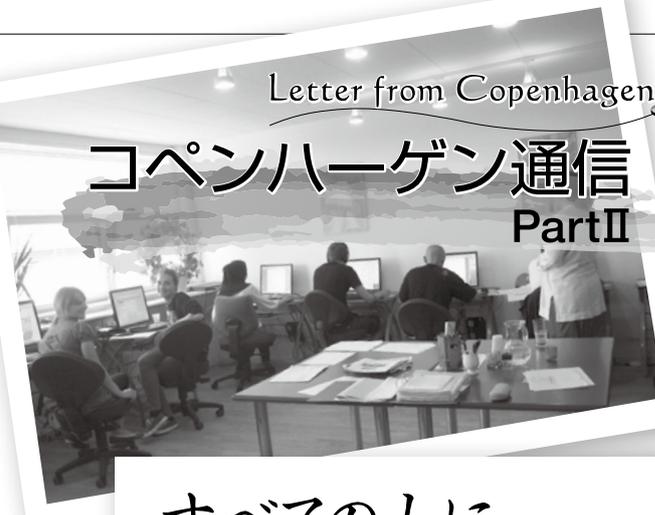


コペンハーゲン通信 PartII 9



デンマーク王国 DATA

人口551万人(≒北海道)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。



ジョブセンターは日本のハローワークに近いでしょうか。ただし職業紹介自体はオンライン化されており、職員の仕事は求職者のカウンセリングや、就職活動のサポートが主という印象でした。写真は履歴書作成をはじめとする求職活動の「いろは」を行うワークショップ。

当会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度で高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。

すべての人に居場所がある社会



樋口 麻紀子

在デンマーク日本大使館一等書記官
(経済同友会事務局より出向中)

このところ、“room for everyone”、すなわち「すべての人に居場所がある」という表現を耳にする場面が何度かありました。学校や社会に適応する上で問題を抱えている人々の意欲を引き出し、社会との接点を持たせるための取り組みについて話を聞いているときのこと、「デンマークの社会(学校)はかくあらねばならない」という文脈で、さらりとした表現が出てくるところに、さすがデンマークと感銘を受けました。

その後、幸いにも、何度か雇用政策や若年者支援に関し、現場の話を聞く機会に恵まれました。一般的な教育課程のほかに、前述の学校不適應の若者に自信と将来への展望を持たせることを目的とする学校や、塗装・縫製・金属加工など実践的職業訓練を施す機関があり、失業者就労支援を行うジョブセンターの中には、生活習慣の立て直しや人との協業を行う社会化訓練、履歴書の書き方まで、手厚い支援を行っているところもあります。

一人ひとりに手間と時間をかけているさまを見ているうちに、「素晴らしい」という思いとともに、なぜここまでやるのか・できるのかという疑問も残りました。

自分なりの答えに思い至った契機は、就労支援について伺った説明での「職を探すか、それが困難な状態なら、訓練・教育等の就労促進プログラムに加わること。それは個人の権利であり義務でもある」「どんなに小さくても良いから、労働市場との接点を持たせ、それを徐々に大きくしていくことが大事」という言葉でした。

デンマークは人口550万人の小国であり、他の先進国同様、中長期的な労働人口の減少傾向が深刻な課題として指摘されています。しかし労働参加率は既に男女共に高く、平均77%。新たに大きな層の人口を労働力化する余地はありません。今働いている人を活用しようにも、60歳以上の労働参加率が30%を割り込むほど、早期退職が定着しています。その上、高負担・高福祉のデン

マークにとって、労働者／納税者の層がやせ細ることは、即デンマークモデルの危機を意味します。

このような中、失業等の問題を抱えた個人への支援は、「困っている人を助ける、社会に救い入れる」だけのものではないでしょう。手厚く人に優しい制度の背景には、週5日間フルタイム、高い生産性で働けない人であっても、個人の教育・訓練のためにどれほどの投資が必要でも、働く可能性と能力を秘めた人材を一人たりとも無駄にはしない、できない、という危機感があるのではないのでしょうか。100%の力で働けない人たちの、20%、60%、80%の労働力も丁寧に市場に取り込んでいく動機と必然性がそこにあるのだと思います。

もちろん大前提として、社会の中で自分の役割を果たすことを喜びとする価値観が根付いていることも大きいでしょう。ただ、おのおのが自分のできる限りにおいて社会に参画し、その制度を支えることを求め、切実にそれを必要としている社会としてデンマークを見たとき、それは優しいと同時にとても厳しい社会でもあるように思いました。



職業訓練機能を有する教育機関の多くに、「テキスタイル※」部門があるのは、やはりお国柄でしょうか。
※織物・布地



ジョブセンターの中に、簡単な職業訓練ワークショップもありました。放置自転車を集めてこのワークショップで修理、販売する計画もあるそうです。